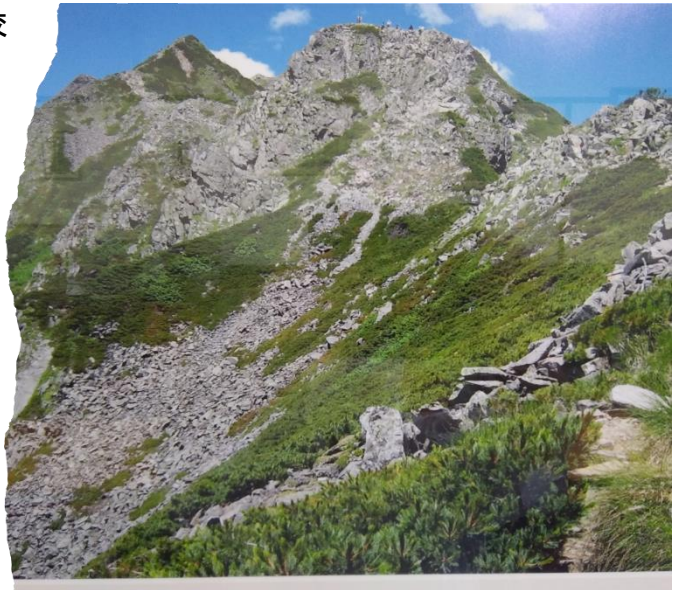


みなさん、こんにちは。

探究ウィーク、特編授業の1週間が終わろうとしています。ある意味、非日常の1週間だったと思われませんが、それぞれが自分の将来について考える1週間だったとも思います。1・2年生の行っている探究は、将来につながる学びの方法や学びの楽しさを経験しているわけで、大学入試のための学習も当然重要な要素ですが、その先を見つめながら、意識しながら学習してほしいというのが、探究学習の持つ意味であると考えています。そして3年生の今週末は、まさに受験体制へのスイッチの切り替えです。高校総体や、とんぼ祭、定期演奏会などで燃え尽きた皆さんも、あの時やり切ったエネルギーが自分にある、そんな自分を信じて受験勉強に突入してください。手遅れなんてことはありません。自分の進路希望目指して、今、尽くせることを尽くしてほしいと思います。

さて、今年も1週間後に、深志高校にとって、決して忘れてはならない8月1日がめぐって参ります。今から57年前の、1967年、昭和42年8月1日13時40分ころ、本校の2年生が学年の行事として集団登山を行っていた西穂高岳独標で落雷に遭い、11名の生徒の尊い命が奪われ、13名の方が重軽傷を負うという遭難事故が発生してしまいました。2、3年生には、昨年、一昨年の1学期終業式の折にもこの事故のお話をしましたので、きっと記憶に残っていると思いますが、1年生は初めてですから、ぜひ記憶に留めていただきたいと思います。



当時、本校では、毎年夏休みに2年生の希望者を対象に、西穂高岳登山を行っていました。西穂高岳というのは、長野県と岐阜県の県境にそびえる標高2909mの山で、最後の西穂山荘から山頂までは、なかなか険しい道のりです。

事故の起きた昭和42年の2年生は、深志21回生の皆さんです。何回生というのはとんぼ祭の回数と同じですので、今年の3年生は77回生です。覚えておいてください。それで21回生は参加希望者が多く、50人くらいずつ2班に分けて、前期と後期の2回で実施することになっていました。事故にあったのは、その前期の方でした。

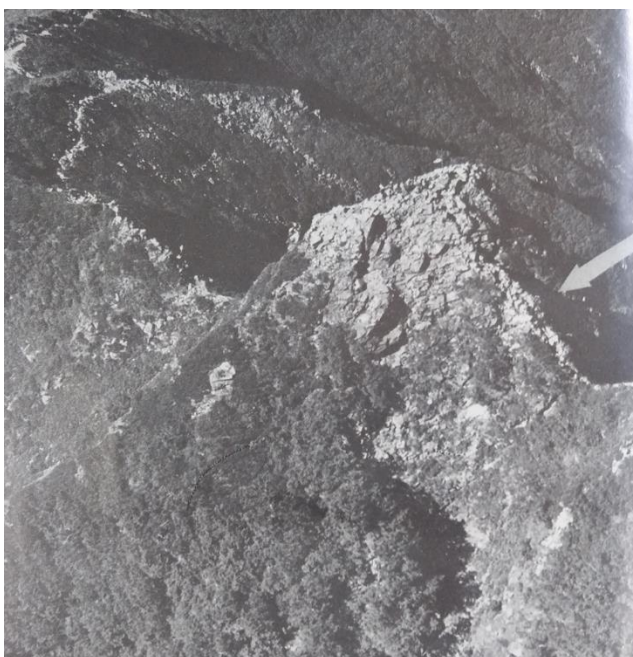
事故の当日は快晴、前日上高地のキャンプ場で宿泊し、早朝に出発して、気持ちの良い天気のもと、お昼ごろには西穂の山頂に着きました。写真(スライド)の一番奥の尖がったピークです。この山頂まで到達したのは、生徒41人、先生5人の計46人のパーティーでした。

雲行きは少し前からあやしかったのですが、ここでついにぼつりぼつりと雨が降り出しました。雨具をつけて急いで下(くだ)りにかかったのが、午後12時40分頃だったそうです。そのころにはすでに遠くで雷もなり始めたようです。1時間弱をかけて、一行は独標という大きなピークに差し掛かりました。写真に示した手前の台状になっているピークが独標なのですが、この独標をこえれば、ハイ松地帯から間もなく西穂山荘に至りますので雨も避けることができます。

独標は高さが10メートル~20メートルくらいの岩山で、両側が絶壁となっている狭い尾根ですので、西穂高岳の山頂に行くのにも帰るのにも、尾根伝いにそのピークを登って降りる必要があります。迂回することはできません。

雨はだんだんと強まってきて雹も体を打ち付け、先頭が独標に差し掛かるころには、雷鳴大きくなってきました。しかし岩場がむき出しの尾根には逃げ場もなく、一行は何とか独標を越えて、その先のハイ松地帯へ逃げ込もうとしていた矢先、落雷は深志高校の一行を直撃してしまいました。

写真は、西穂山頂側から独標を写したものです。落雷があった時、すでにピークを越え、向こう側の南側の尾根を下っていた方が10名、台状の独標頂上にいた方が8名、そしてこの写真(スライド)の矢印で示した先の北側の尾根を登っていた方が23名、独標に入る手前にいた方が5名いらっしゃいました。亡くなった方々11名は、すべて北側の尾根を登っていた方でした。亡くなった要因としては、落雷による電撃死が9名、電撃により転落したことが要因だった方が2名でした。当時の事故の様子として、破裂するような大きな音がしたこと、ぱっと黄色く明るくなった瞬間があったこと、焦げ臭いにおいがしたこと、その瞬間石が飛び交ったことなどが記録に残されています。



毎年、同窓生の有志の方々及び、山岳部の皆さんが、8月1日に西穂に慰霊登山を行っており、今年も実施予定です。

また、皆さんは、講堂の南側にこの事故で亡くなられた方の慰霊碑がたてられていることをご存知ですか。学校では毎年8月1日の午後1時30分に、この慰霊碑前で追悼式を行い、1時40分に黙とうを行っています。例年この慰霊式にはご遺族や21回生の皆さんなど関係者の皆さんが集まります。今年も実施しますので、在校生の皆さんも、ぜひ慰霊式にご参加いただき



たいと思っています。亡くなられた11名の方々のことや、この事故のことは決して忘れることなく、未来に語り継いでいかなければなりません。最近のご遺族の皆様も百歳近くになっており、慰霊式においでいただける方もご兄弟姉妹の方が中心となり、少なくなっていました。だからこそ、残された我々が思いを込めてこの式を継続させる必要があります。暑い中ですし、それぞれ予定等があるかもしれませんが、ぜひ、午後1時30分に、大勢の在校生の方々に集まっていただきたいと希望しています。3年生も午前中で補習が終了すると聞きましたので、時間まで校内で自習をしていただき、午後1時30分には講堂南側に集まっていただいて、この遭難事故を実感し、黙祷をささげていただきたいと願っています。また、この遭難事故から50年を経過した2017年に信濃毎日新聞が特集を組んだ記事を、皆さんにグーグルクラスルームで配信を行いました。21回生の皆さんがどのような思いを抱き、50年を迎えたのか、その思いをぜひ共有化していただきたいと願っています。そして今年57年目を迎える、先輩方がどのような思いを持って、8月1日に来校されるかを想像していただきたいと思います。



ところで、今日あらためてこの事故を振り返った時、どのような行事においても、安全管理のために尽くすべきことを尽くすというリスクマネジメントを意識し続けることが、我々教職員の責務であると強く感じています。例えば今日の落雷対策として、かすかな雷鳴がした際、遠ければまだ大丈夫はありません。積乱雲が湧いてきて天候の急変があったり、少しでも雷鳴が聞こえたら、屋外での活動を中止し安全な場所に身を隠すべきであるということが一般化していますが、いざという時そうした行動に移せるよう、常に胸に刻み付けておく必要があるでしょう。落雷だけではありません。何事によらず、毎年やっているから今年も大丈夫だろう、ではなく、本当に今年も大丈夫なのかを丁寧に事前に検証しておくことを、我々は意識していくべきだろうと思います。さらに申し上げれば、生徒の皆さんにもそうしたリスクマネジメントの意識を持っていて



欲しいと感じています。例えば、明倫坂を降りた久保田外科の前の一時停止を無視して猛スピードで突っ切る自転車。交差する側の道路は一時停止ではありませんから、深志生が飛び出してくることを知らない車はそのままスピードを落とさずに交差点に進入してくるでしょう。その場合どのような惨事が起こるのでしょうか。そうした場面の想像力を働かせて、自転車事故を無くすためにも皆さんにもぜひ協力して

いただきたい、いつも大丈夫だから、今日も大丈夫だろうは危険です。皆さんの命を守りたい、深志のすべての教員が共通でもっている願いでもあります。

さて、この遭難事故から四十年が経過した頃、亡くなられた方々の親御さんが慰霊式等でおっしゃられた言葉が記録に残っておりますので、少し長くなりましたがこの話の最後にお聞きください。

「親にとって子供を亡くすことほど、不幸で辛く悲しいことは無い。皆さんは命を大切に、亡くなった子供たちの分まで人生を全うして欲しい。」

また、別の方は、「長男を亡くしたあの日、神様は耐えることのできない試練を私にお与えくださいました。しかし世の中に悲しみの無い人はいないと教えられ、悲しみに遭ったのは私達だけではないと気づき、生きるという営みを取り戻して参りました。どのような悲しみの中にあっても、必ず生きる営みを取り戻せるということを知りました。でも心に受けたあの日の傷はなかなか癒されません。」

これを読んだ時、本当にご遺族の魂の叫びだと感じました。そして自分のお子さんを亡くしているのに、暖かく後輩たちを見守ってくださっているのだと、心の中から感謝の気持ちがわいてきました。

みなさん、何よりも皆さんの命が大切です。皆さんには、自分の命を大切に、相手の命を大切にする。そして、どのような苦しみの中にあっても、必ず生きる営みを取り戻せるのだと信じていただきたいと願っています。私からの話しは以上です。どうぞ充実した夏休みをお過ごしください。そして、もし休み中、何かつらいと感じることがあったら、どうぞ家族や先生方、あるいはいろいろな相談機関に相談をしてみてください。ぜひ、心も体も元気で夏休み明けを迎えて欲しいと願っています。

話題は変わり、もう一つ報告をさせて下さい。すでに報道等を通じてご存じの方も多いと思いますが、イギリスにおいて第65回国際数学オリンピックが開催され、その大会に日本代表として2年4組の狩野慧志さんが出場されました。そしてこれも新聞等の報道によりすでにご存じの方も多いと思いますが、大会の結果、狩野さんは個人総合4位となり、上位の成績の者に与えられる金メダルを受賞しました。本当におめでとうございます。今日は狩野さんに放送室においでいただきましたので、メダルを見せていただいて、感想をうかがいたいと思います。狩野さん、どうぞお入りください。